



K A P P A   N O V E L S

長編推理アクション小説

# 星の旗 上

森村誠一

お願い

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただきましたら、ありがたく存じます。

なお、最近、「カッパ・ノベルス」にかぎらず、どんな小説を読まれたでしょうか。また、今後、どんな小説をお読みになりたいでしょうか。読みたい作家の名前もお書きくわえていただけませんか。

どの本にも一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば幸せに存じます。

東京都文京区音羽二―二―一三

(〒112-11)

光文社「カッパ・ノベルス」編集部

長編推理アクション小説 **星の旗** 上

1994年10月25日 初版1刷発行

著者	もり 森	むら 村	せい 誠	いち 一
発行者	森	元	順	司
印刷者	堀	内	俊	一

東京都千代田区三崎町2-18-11  
堀内印刷

発行所 東京都文京区音羽2 株式会社 光文社  
振替 00160-3-115347 電話 東京(3942) 2 2 4 1(代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。 (ナショナル製本)  
表紙の模様・意匠登録 116613 © Seiichi Morimura 1994

ISBN4-334-07109-0

Printed in Japan

〔R〕本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

長編推理アクション小説

ほし                      はた  
星の旗上

もりむらせいいち  
森村誠一



カッパ・ノベルス



星の旗へ上へ 目次

異常の油	128	落ちた英雄	5
生き恥の尾	105	帰らざる天女	21
敗れた盟友	84	死ぬための目的	59
		死ぬときは独り	73
		老いたる揃い踏み	187
		繁栄の犠牲	166
		買収の裏勘定	145
		末端の嗅覚	200
		自らの埋葬	215
		合宿の成果	238

イラストレーション

坂本富志雄

## 墜おちた英雄

### 1

搭乗員整列の号令がかかり、戦闘指揮所の前に一列横隊に集合した搭乗員を前にして、基地司令官矢田だまさのぶ政信大佐がおもむろに立った。

「前途有ゆう為いの諸君をふたたび還かえらぬ特攻に送り出すのは断腸の極きまみである。特別攻撃隊の任務についてはあらためて言うまでもなく、諸君が覚悟の通りである。我が国は建国以来未曾有みぜうの困難に直面し、諸君必死の攻撃をもって当たらぬ限り、戦局の打開は

期し難がたいまでに立ち至った。必ず一機をもって一艦を屠ほれ。諸君のみを死なせはせぬ。特攻は最後の一兵までつづく。我々もまた諸君の後につづくであるう。

一億心を一にして特攻となつて当たるならば、いかに物量を誇る敵といえども必ず撃滅し、最後の勝利は我らのものとなるであろう。諸君の一死こそ救国の先駆けとなるものである。武士ぶしの習いとして肉体は滅んでも名を惜しめ。個人に死して悠久ゆうきゆうの大義に生きよ。いまこそ護国の鬼と化して、困難に進んで身を挺たくしてもらいたい。以上である」

矢田大佐は特攻隊を送るつど繰り返した同じ訣別けつべつの言葉を告げた。

それを聞く者はいずれも二十歳前後の若者である。まだ童顔を残した少年航空兵も混じっている。

攻撃隊員は飛行服の胸に隊名、階級、氏名を記入した白い布を縫いつけ、飛行帽の上に日の丸のつい

た鉢巻を締めている。中には奉仕隊の女学生が送った血染めの鉢巻を締めている者もあった。

司令官の訓示の後、指揮官の平井勇一中尉が立った。

「いよいよ出撃のときがきた。改めて言うことはなにもない。訓練の通りにやれ。敵艦に突っ込むときは目を見開いている」

平井中尉は陸軍航空士官学校第五十六期生である。この平井中尉の許、十一機の特攻機が出撃する。

平井の訓示の後、別れの盃さかずきが交わされた。

「それでは行ってまいります」

平井中尉以下隊員が立列して見送っている基地司令官、副官、参謀などに挙手の礼をすると、「かれ」の号令と共に、隊員は一斉に準備線に並んで乗機に向かつて走った。

整備員によって徹夜で整備された特攻機は、すでにプロペラが音を立てて回転している。

木島一郎少尉は列線に並ぶ自分の乗機一式戦闘機「隼」に乗り込んだ。

整備員が徹夜で整備してくれたにもかかわらず、ガソリンの吸い上げがあまりよくない。この不調のエンジンで二百五十キロ爆弾を抱え、グラマンのようよする海域を沖繩まで六百五十キロ、隼で二時間、九七式で二時間半飛行しなければならない。

特攻機には空中戦のための武装は一切施されていない。重い爆弾を抱えてよたよた飛んで行く特攻機が、途中でグラマンに捕捉されたら、狼の群れに出会った豚のようなものである。

それでも一式戦闘機が当たったのはよい方で、すでに練習機となっている九七式戦闘機や九九式爆撃機は二百五十キロ爆弾をつけて空に浮かぶのがやっという状態である。

このおんぼろ飛行機をかき集めた特攻搭乗員による十一機で、空母を主軸とする機動部隊を攻撃する



という用兵は、世界のどこの軍隊にもかつてない。僚機が車輪止めを外して、次々に出発線に向かつて地上滑走を開始する。隊長機が砂塵を巻いて離陸した。

司令官以下整備員、地元の村人、奉仕隊の女学生らしい群れが歓声を上げて見送っている。

木島は彼女らの群れの中に秋岡恭子の姿を探した。距離があるので、彼女の姿を見分けられない。

僚機は次々に舞い上がり、空中を旋回しながら待ち機している。

木島はある計画を胸に秘めていた。

特攻は原則として志願という形を取っていたが、このころになると、それは制度になっていた。死の制度である。

志願者は一步前へとと言われて、自分だけ出ないわけにはいかない。

木島は東京A学院大学の学生から、召集されて特別操縦見習士官一期生となった。

戦争の行方に懐疑的ではあったが、苛烈な戦局を肌を感じていた当時の若者の一人として、どうせ国の楯となるなら陸の上を埃まみれになって駆けまわるよりは、空の上で精一杯活躍してやろうという単純な発想から、特操を志願したのである。

姑が嫁をいびるような陰湿な内務班のしごきから逃れたいという気持ちもあった。

内務班で古兵に殴られ、歯を折られ、鼓膜を破られた者は枚挙にいとまがない。脊髄を損傷して半身不随になった者もいる。

だが木島の楽観は粉碎された。

操縦過程の初歩は体罰であった。手で殴るだけでは足りず、営内靴や剣の鞘や半長靴の座金で容赦なく顔面を殴りつける。目が切れ、鼓膜を破られ、顎の骨を折られた者もいた。

それはもはや兵を鍛え上げるためではなく、憎しみに満ちた私的制裁であった。

彼らは部下を人間として見ておらず、消耗品と見なしていた。

その上官の思想が端的に表われたのが特攻隊である。

世界の戦史上、どんなに危険な戦いにおいても、必ず生還の道を残していた。生還率ゼロの特攻隊は日本軍だけであった。

人間ではなく消耗品であるから、生還する必要はまったくくない。

彼らに課せられた訓練は、敵戦闘機の迎撃を潜るための超低空飛行と、千メートルないし千五百メートルの高度からの急降下だけである。空中戦の技法などはまったく必要ない。要するに人間爆弾としての体当たり攻撃の特訓であった。

護国の鬼、救国の軍神とおだて上げても、軍は彼

らを消耗品の人間爆弾としてしか扱わなかった。

人間爆弾には敵戦闘機と渡り合うための機銃も必要なければ、基地と交信する無線機も要らない。

外せるものはすべて外して、浮かした重量分だけ爆弾を積み、グラマンの大群の中に放り出すのである。

木島はそんな軍の姿勢に、次第に虚しくなった。国のためには死ねても、こんなやつらのためには死ねない。

だが、ついに彼にも出撃命令が下った。命令を拒否することはできない。

どうせ死ぬにしても、消耗品としてではなく、人間として死にたい。

一般の学園で自由の気風の下にのうのうと遊学していた若者を、一片の召集令状をもって戦争という網の中にすくい取り、戦場という死刑場に向けて応なく送り出してしまふ。

網にからめ捕られたが最後、そこから逃げることはできない。

だが、このまま黙って死刑にはならない。木島には密かに心に期するところがあつた。

## 2

約一カ月の速成教育を受けた特攻隊は、九州、沖縄方面を作戦管区とする第六航空軍に集められた。

木島の所属する平井隊は、三重県明野<sup>あけの</sup>教導飛行師団で編成された。

一カ月の、と号要員（特攻隊員）教育過程を終えた搭乗員は、四月二日、明野の師団本部で顔を合わせ、大阪<sup>おおさか</sup>の大正飛行場<sup>たいしやう</sup>において各乗機を受け取つた。

五月初め、木島の所属する平井隊は突撃命令を受けた。

「空母二以上を含む敵機動部隊、沖縄北方の海上を北上中、これを捕捉して撃滅せよ」

という第六航空軍司令部からの命令である。

空母二隻以上を含む大機動部隊に対して、おんぼろ旧型機の寄せ集めわずか十一機、それも戦闘機の護衛もなく攻撃せよという命令である。

無謀というも愚かな、これはすでに作戦命令ではなく自殺命令に等しかった。

彼らはこれまでも四月の半ばに出撃命令を受けていた。このときは出発したものの天候が悪く、途中から引き返して命拾いをした。

教育部隊、明野、大阪、各地の飛行場を南下して鹿児島<sup>かごしま</sup>県知覧<sup>ちらん</sup>へ着いたとき、木島はついに死刑台の階段の最上段に足をかけたような気がした。

知覧<sup>ちらん</sup>に駐屯<sup>ちゆうとん</sup>して出撃命令を待つ間、木島は勤勞奉仕隊の女学生秋岡恭子と知り合った。

二人は急速に親しくなった。恭子は自分の兄のよ

うな青年が、進んで困難に身を挺しようとしている姿に激しく感動した。

彼らのために自分になにかできることがあるなら、してやりたい。

恭子は木島の第一次の出撃の際、自ら切り出しで指を切り、その血で手拭に日の丸を描いて木島に贈った。

第一次の出撃は悪天候のおかげで命拾いをしたが、二人は急速に接近した。

恭子は残り少ない日々の名残りを惜しむために、木島にすべてを捧げた。

一日刻みに若い二人は命を確かめ合った。

「あなただけを死なせたくない。私も一緒に連れて行って」

おもいつめた恭子は、木島にせがんだ。

「女を特攻機に乗せることはできない。きみは残って、おれの分も生きてくれ」

木島は言った。

「あなたが死ねば、私も死んだも同然よ。私たち、同じ日に死ぬのよ」

恭子は訴えた。

恭子にせがまれて、木島は死刑台の一方にかすかな曙光を見たような気がした。

恭子を特攻機に乗せて中国へ飛べば、あるいは生きられるかもしれない。

グラマンが舞めき、無数の対空火器が待ち構えている沖繩の方角には、百パーセント死が充滿している。敵艦にたどり着く前にグラマンの餌食になるのは目に見えている。

だが沖繩の方角から逸れば、チャンスがあるかもしれない。一式戦の航統距離は三千キロ、中国大陸へたどり着ける。

単座ではあるが、操縦席には女一人潜り込める程度の余裕はある。駄目でもともと、もし二人して中

国へ脱出できれば、新しい世界が開けるかもしれない。

四方真っ暗な絶望的状况の中で、恭子と手に手を取っての脱出行に、木島は一筋の希望の光を見たようにおもった。

「出撃のとき、きみは見送りの列に並んでいるだろう。おれは準備線から出発線まで地上滑走する際、見送りの列の近くに乗機を運んで行く。きみは乗機まで走れ。おそらくみんな驚いて見ているだけで、止める者はいないだろう。きみを乗せてから離陸する。いいね」

二人は出撃前に打ち合わせた。

先発機は次々に離陸し、木島の番がきた。先発機の大半は空中に待機して、全機離陸するのを待っている。

木島は両手を顔の前に合掌がっしょうするような形に揃え

て挙げ、左右に開いた。チョク外せの合図である。

待ち構えていた二人の整備員がチョクを外した。

エンジンはわずかに増速、機体はゆっくりと動き始める。

見送りの歓呼が高まる中を、木島の乗機は地上滑走を始めた。

準備線から滑走路の端の出発線に向けて、木島機は見送り人の列にしばらく並行する形で地上滑走をする。

「恭子、なにをしている。早く来い」

木島は増速したエンジンの間から見送り人の列に向かって叫んだ。

だが、恭子は打ち合わせた通りに出て来ない。いま出て来なければ乗り込む機会を失ってしまう。

「なにをしている。早く来い」

木島は地上滑走のコースをやや外れて、見送り人の列に機体を近づけた。だが恭子は来ない。

見送り人の顔が一人一人識別できるほどに接近した木島は、愕然とした。

見送り人の中に恭子がいらない。いや、恭子だけではなく、奉仕隊の女学生がだれもいない。女は地元の人たちばかりであった。

後で知ったことだが、引き返してくる特攻機が多く、奉仕隊の女学生に未練を残すためと推測した司令部が、女学生の見送りをやめさせたのである。

木島は唯一のチャンスを失った。コースを逸れて、いつまでも地上滑走をつづけているわけにはいかない。

ようやく出発線に着いた木島は、死刑台の空に向かってスロットルを全開した。

急ごしらえの特攻隊員をかき集めた平井隊には、隊号はなかった。と号五十隊が平井隊にあたえられた仮隊号である。

編隊が奄美諸島にさしかかったとき、木島機のエ

ンジンが不調を訴えた。

もともと本調子ではないエンジンをだましましたしここまで飛んで来たが、黒煙を吐き出して馬力が急激に落ちた。

まだ目指す沖縄まで三百キロはある。とうてい飛行継続不能と判断した木島は、僚機にバンクを振って別れを告げた。

エンジンは息も絶え絶えで、基地まで引き返せない。

敵の位置も十分にあたえられず、索敵攻撃、つまり沖繩に行つて敵を探して攻撃せよという、いいかげんな命令であった。

僚機と別れた木島は、奄美諸島中の一つとおもわれる島近くの海面に不時着した。

幸いに木島は軽傷を負っただけで海面に放り出された。

海を漂流していると、間もなく島から船が漕ぎ出



して来て、

「おーい、大丈夫か」

と声をかけられた。

船には日本軍の兵士が乗っていた。島の守備隊が木島機の不時着を見ていて、救援のために漕ぎ出して来たのである。

木島は際どいところでまた一命を拾った。

奄美大島から離れたその離島には、どんな戦術的な価値があるのか、北原きたはらという大尉以下約三十名の守備隊が駐屯していた。

北原は豪放磊落ごうほうらいらくな男で、

「せっかく拾った命だ。慌てて還かえることはあるまい。ここでゆっくり静養しなよ。そのうちに戦争は終わる」

と言いつつ。

日米最後の決戦場沖繩を指呼の距離において、こ

の離島は戦争などべつの世界のこのように、平和な明け暮れを過ごしていた。

沖繩攻略に巨大な物量を注ぎ込んできた米軍も、この離島の守備隊など眼中に入れていないようである。

本土の司令部も離島守備隊の存在を忘れてしまったかのように、なんの音沙汰もない。

また北原大尉も一切連絡を取ろうとせず、日米両軍の戦争の気配をどこ吹く風と聞き流しながら、この浮世離れした離島での生活を楽しんでいるようであった。

朝はそれぞれ起きたときに起き出し、魚を釣ったり泳いだり、時には相撲や野球に興じたりしながら過ごす。

夜は島民からつくり方をおしえられた泡盛あわもりと、昼の間漁とった海の幸で酒宴を開く。軍という雰囲気はまったくない。



北原大尉の許、よくまとまっています、和氣あいあいたる離島キャンプのグループのようであった。

「こんな馬鹿馬鹿しい戦争を、無能な大本営の命令を忠実に守って真面目にやることはないよ。あんた、アメリカ軍が特攻機をなんと呼んでいるか知っているかね。やつら、馬鹿爆弾と呼んでいるよ」

「馬鹿爆弾」

「そうさ。特攻も初期のうちこそ戦果があつてアメリカ軍を震え上がらせたが、こちらの手の内がわかつてくると、リーダーで監視し、戦闘機で網を張り、隙間なく対空火器網を張りめぐらして、ただの一機も近づかせない。

そこへなんの武装もせず、重い爆弾を抱えて、ただ無駄死にするために、よたよたと飛び込んでくる特攻隊が、やつらの目には馬鹿爆弾に映るのさ。大本営は日本の人口が一億、アメリカの人口が一億五千万だから、一人で二人殺せば日本が勝つような

ことを言っているが、そんな連中に戦争の指揮を取らせたら、日本人は全滅する。せめてこの南の離れ小島で我々だけでも生き残ってやりたいとおもつてね。有難いことに司令部も、おれたちのことをすっかり忘れていろいろらしい」

北原大尉は豪放に笑った。

守備隊の中には、出撃途中不時着した特攻隊員も何人も混じっているらしい。

無謀な戦争であることはわかっていたが、進んで身を挺して国の楯たらんとする特攻機が馬鹿爆弾と見られていることに、木島はショックを受けた。

北原大尉以下守備隊員は、とうにその馬鹿戦争の行方に見切りをつけている。

木島は北原に勧められるままに、この離島に腰を落ち着けようかとおもった。

北原守備隊は沖繩の至近距離にいるだけに、米軍の実力と戦局を冷静に見極めていた。